

名詞句からの Wh 移動

宗 正 佳 啓 (社会環境学科)

Wh-movement from a Noun Phrase

Yoshihiro MUNEMASA (Department of Social and Environmental Studies)

Abstract

This paper suggests that a noun phrase projects up to CP as a phase. When a finite clause is presupposed, the clause bears a factive operator as in the analysis of Melvold (1991). The operator blocks wh-movement of an element the clause because it yields an intervention effect. When a noun phrase is presupposed, it also bears an operator as in the case of factive clause. The operator occurs in the SPEC-CP of the noun phrase and blocks wh-movement from the noun phrase. If a noun phrase is not presupposed, an operator does not appear in the SPEC-CP of the noun phrase, which does not block wh-movement from the noun phrase. When a wh-in-situ occurs in a noun phrase that is not presupposed, it is licensed by its licenser bearing Q-feature and wh-feature because of no operator between the licenser and the licensee. When, however, a wh-in-situ occurs in a presupposed noun phrase, the wh-phrase is not licensed. This is due to the fact that an operator becomes an intervener between the wh-in-situ and the licenser of the wh-phrase.

Key words: *wh-movement, noun phrase, CP, operator, presupposition*

1. 序

Wh 移動は、普遍文法の本質を追究する上でとりわけ重要な現象であり、従来様々な分析が提案されてきた。最近の極小性理論に基づく分析では、素性の一致関係が移動の演算上の動機付けになっており、解釈可能な素性と解釈不可能な素性、及び位相(phase)に指定される EPP (Extended Projection Principle) 素性を仮定することで、wh 句の顕在的移動と非顕在的移動が統一的に扱うことが可能になっている。しかし、名詞句からの wh 移動の可否に関しては様々な条件が課されるが、その条件に対しては統一的な説明が与えられていない。

本稿は、Chomsky (2000) でとられている wh 移動に関するメカニズムを敷衍し、名詞句の構造を洗い直し、名詞句に生起する演算子 (operator) を仮定することで、名詞句からの wh 移動の可否に対して直接的且つ統一的説明を与えることを目的とするものである。

2. 名詞句からの wh 移動

英語は wh 移動を持つ言語であるが、Chomsky (2000) の枠組みに従ってその具体例を見てみよう。

(1) [_{CP} What_i did_j -C [_{TP} John t_j [_{VP} buy t_i]]]
Chomsky (2000) の枠組みに従うと、(1)のような文において、CP の主要部の C は解釈不可能な素性である Q 素性を持っている。また、wh 句は解釈可能な Q 素性と解釈不可能な wh 素性を持つとされている。(1)の解釈不可能な Q 素性を持つ C は探査要素 (probe) となり、それと合致 (match) する wh 句を探し出し、その後一致を起こす。この一致により、C の解釈不可能な Q 素性と wh 句が持つ解釈不可能な wh 素性が削除されることになる。英語においては、(1)の C には EPP 素性が指定されているため、wh 句が CP の指定部に移動することでこの素性が満たされる。この EPP 素性は Chomsky (2007, 2008) では edge feature と呼ばれているが、本稿では便宜上 EPP 素性と呼ぶことにする。

しかし、wh 移動は自由に行えるということではなく、島の制約、下節の条件といったある種の条件が課される。名詞句からの wh 移動も同様に何らかの条件が課される。

(2) a. Who did you see a picture of t?

b. *Who did you see the picture of t?

(2)の例は名詞句からの wh 移動の具体例であるが、こうした例の文法性に関しては、特定性条件などによって説明されていた。

このように名詞に付く決定詞が wh 移動を左右する例は他にもある。Milsark (1974) は決定詞を弱い決定詞と強い決定詞に分けているが、(2a)の不定冠詞は弱い決定詞に属する。その他の弱い決定詞には、複数形の名詞, many, several, some 等があるが、これらが付いた名詞句からの wh 移動は容認される。

- (3) a. Who did you see pictures of?
 b. Who did you see many pictures of?
 c. Who did you see several pictures of?
 d. Who did you see some pictures of?

一方、(2b)の定冠詞は強い決定詞に属する。その他の強い決定詞には every, most, each, all 等があるが、これらが付いた名詞句からの wh 移動は容認されない。

- (4) a. *Who did you see every picture of?
 b. *Who did you see most pictures of?
 c. *Who did you see each picture of?
 d. *Who did you see all pictures of?

また、不定冠詞が付いていても、a certain となって名詞に付く場合、その名詞句からの wh 移動は不可能になる。

- (5) *Who did you see a certain picture of?

上記の例は、決定詞の種類が wh 移動を左右する例であるが、名詞句に指定主語が付く場合も wh 移動が不可能になる。

- (6) *Who did you see John's picture of?

こうした例は以前は指定主語条件によって扱われた例である。

これらの例から分かることは、名詞に付く決定詞の種類によって名詞句からの wh 移動が左右されるということである。しかし、名詞に定冠詞の the が付いていても wh 移動が可能な場合がある。

- (7) Which cities did you witness the destruction of t?

(Finego and Higginbotham (1981 : 420))

また、逆に名詞に不定冠詞が付いていても名詞句からの wh 移動が不可能になる場合がある。

- (8) *What did you destroy a picture of?

(Diesing (1992 : 100))

これらの事実は、名詞句からの wh 移動は決定詞の種類によって決まらないということを示唆している。では、名詞句からの wh 移動を左右するものは何であろうか。Finego and Higginbotham (1981) は特定性 (specificity) という概念で名詞句からの wh 移動の可否を説明している。通常、不定冠詞が名詞に付くとその名詞句は特定性を持たないが、定冠詞が付けば特定性が生じる。この特定性が名詞句からの wh 移動をブロックしているということである。しかし、(7)のような例では、the destruction は定冠

詞が付いているが、特定性の読みがないため wh 移動が可能になっているという。この分析が正しいとすると、(8)のような例の名詞句 a picture は特定性の読みを持つことになる。

類似した分析が既に Erteschik (1973) にある。Erteschik は wh 移動は基本的に意味的に優勢 (dominant) な部分から可能であることを示唆している。この意味的優勢という概念は、文又は句の内容が前提になっておらず、また先行文脈で言及されていることもなく、文中の他の部分よりも際立っていることを表している。例えば、(9)のように主語からの wh 移動は不可能であるが、これは主語自体が意味的に優勢とならないためであるという。

- (9) *Who were pictures of seen by John?

Diesing (1992) は、Finego and Higginbotham (1981) や Erteschik (1973) の分析を捉え直し、名詞句からの wh 移動はその名詞句の内容が前提になっている場合不可能になるという主張をしている。つまり、定冠詞が付けば通常その名詞句は前提となる。それゆえ、その名詞句からの wh 移動は不可能になる。また、前述の(3)の弱い決定詞が付いた名詞句は前提とはならないため名詞句からの wh 移動が可能で、(4)のように強い決定詞が付いた場合は前提となるため wh 移動が不可能になるという。(5)のように a certain が名詞に付く場合は名詞句が前提となり、(6)のように指定主語が付くことで名詞句が前提になるため wh 移動が不可能になるという。(7)のような例では、Finego and Higginbotham (1981) の分析では the destruction には定冠詞が付いているが、特定性の読みがないため wh 移動が可能になるが、Diesing (1992) の分析ではその名詞句が前提とならないため wh 移動が可能ということになる。さらに、(8)のような文においては、動詞の destroy は破壊する物が前提としてあることを要求しており、目的語はその前提になっている。前提となる目的語の名詞句に wh 句があるため wh 移動が不可能になる。以下の例においても、動詞が目的語の存在を前提とするため、目的語名詞句からの wh 移動は不可能になっている。

- (10) *Who did you tear up a book about?

以上、名詞句からの wh 移動に関する過去の分析を見てきた。Diesing (1992) の言葉を借りると、名詞句からの wh 移動はその名詞句が前提とならない場合可能で、前提となる場合不可能になるということになる。しかし、これは事実のみの記述であり、なぜ前提となる名詞句から wh 移動が不可能になるのか、そのメカニズムが明示されていない。次節ではそのメカニズムを提案することにする。

3. 演算子

前節では、名詞句からの wh 移動はその名詞句が前提となるかそうでないかで可否が決まることを見てきた。前提となる名詞句からは wh 移動は不可能であるが、これは名

詞句に限ったことではなく、節に対しても当てはまる。叙述動詞の補文からの wh 移動は容認されないとされている。叙述動詞の補文はその内容が前提となっており、この点で前提となる名詞句からの wh 移動が不可であるのと同じである。Melvold (1991) は、叙述動詞の補文からの wh 移動は容認されないのは、前提となるその補文の構造が前提とならない補文の構造と異なっているためであると分析している。具体的には、次のように叙述動詞の補文はその CP の指定部に演算子が生起するという。

(11) John regrets [_{CP} OP that [_{TP} he fired Mary]]

この演算子が wh 句が補文内から循環移動する際の経路にあるため、移動障害となる。このため叙述動詞の補文からの wh 移動は不可能になる。

前提となる名詞句からの wh 移動は、叙述動詞の補文からの wh 移動と同じく容認されないので、ここでは、前提となる名詞句においても wh 移動の障害となる演算子が存在すると考える。では、その演算子が生起する位置はどこになるのであろうか。これまで、文と名詞句の間には類似性があることは広く認められている。

(12) The enemy destroyed the city.

(13) the enemy's destruction of the city

(12)の主語、目的語は(13)の the enemy 及び the city と平行関係にある。Abney (1987) はこうした平行関係を DP 分析によって捉えており、(12)と(13)の構造を示せばそれぞれ(14)、(15)のようになる。

(14) [_{TP} the enemy T [_{VP} destroyed [_{DP} the city]]]

(15) [_{DP} the enemy's D [_{NP} destruction [_{PP} of the city]]]

(14)では主語の enemy が T によって主格を与えられており、(15)では enemy が属格を与えられ、destruction の意味上の主語になっている。こうした(12)と(13)に見られる文と名詞句の平行性は、名詞句を NP と考えるとうまく説明ができないが、DP 分析をとれば説明可能になる。DP 分析では、冠詞類、指示詞、some 等の数量詞、属格を付与する D が NP の上にある DP の主要部になると考えられている。(15)では、enemy が DP の指定部に入り D から属格を付与され、文における T からの主格の付与と格付与の面で全く平行関係にある。

このように、文である TP と名詞句としての DP の間には平行性があるが、両者は位相の観点から見れば異なった特徴を示す。Chomsky の命題を位相とする定義からすれば、DP は位相になりうる。しかし、DP と平行関係にある TP は位相ではない。TP の主要部である T は、C や v などの核となる機能範疇 (core functional category) の一つであり、Chomsky (2000, 2001) は、これらすべての核となる機能範疇は、セクションによって完全なる ϕ 素性を持つことが可能であると考えている。また、T は C または V によってセレクトされ、それによって完全なる ϕ 素性を持つ。T と v は動詞の特徴を反映した要素をセレクトする。これに基づくと、文は TP の上に常に CP が存在すること

になる。また、CP は命題に基づく位相であるので、文と名詞句が平行関係にあり、名詞句も位相であると考えれば、(5)に示すように、名詞句は DP の上に CP が存在し、それが位相になっていることになる。

(16) [_{CP} C [_{DP} the enemy's D [_{NP} destruction [_{PP} of the city]]]

このように DP の上に CP が存在すると想定すると、次の例のように all 等の数量詞が冠詞の付いた名詞の前に来る統語配列が説明可能になる。

(17) [_{CP} all [_{DP} the [_{NP} people]]]

冠詞の the 等は DP の主要部に生起するが、その前に all が生起する例では、all の生起位置が問題となる。しかし、all は DP の上にある CP の主要部に入っていると考えると説明可能になる。

以上のように、ここでは名詞句は文と同じく CP まで投射すると考える。このことにより、前提となる名詞句は叙述動詞の補文と同じく CP に演算子を持った構造と平行関係にあることになる。

(18) [_{CP} OP C [_{DP} D [_{NP} N]]]

前述のように、Melvold (1991) の分析では前提となる文では、その CP の指定部には演算子が生起するが、それと平行的に前提となる名詞句もその CP の指定部に演算子が入っているということになる。

では、以上のことに基づいて名詞句からの wh 移動の具体例を見てみよう。

(19) a. *Who did you see the picture of t?

b. [_{CP} who C-did [_{TP} you [_{VP} see [_{CP} OP C [_{DP} the [_{NP} picture of]]]]]]

(19b)は a の文の構造を示したものである。主節の CP の主要部 C には解釈不可能な素性である Q 素性が指定されている。また、元の位置にある wh 句は解釈可能な Q 素性と解釈不可能な wh 素性を持っている。解釈不可能な Q 素性を持つ主節の C は探査要素となり、それと合致する wh 句を探し出し、その後一致を起す。この一致により、C の解釈不可能な Q 素性と wh 句が持つ解釈不可能な wh 素性が削除される。この文において、主節の C には EPP 素性が指定されているため、それを満たすために wh 句が主節の CP の指定部に循環移動する。しかし、(19)の文においては、wh 句を含む名詞句は前提となっているためその名詞句の CP の指定部に演算子が生起する。その名詞句の CP の指定部は wh 句の移動の際の可能な移動経路であるが、そこに演算子が埋まっているためそこを越えた移動になる。これは、移動の局所性を要求する Minimal Link Condition (MLC) に抵触するため、(19)のような文は排除されることになる。

では、次に名詞句が前提とならない wh 移動の例を見てみよう。

(20) a. Who did you see a picture of t?

b. [_{CP} who C-did [_{TP} you [_{VP} see [_{CP} C [_{DP} a [_{NP} picture of]]]]]]

(20)の文において、主節の CP の主要部 C には解釈不可能な素性である Q 素性が指定されている。また、元の位置にある wh 句は解釈可能な Q 素性と解釈不可能な wh 素性を持っている。解釈不可能な Q 素性を持つ主節の C は探索要素となり、それと合致する wh 句を探し出し、その後一致を起こす。この一致により、C の解釈不可能な Q 素性と wh 句が持つ解釈不可能な wh 素性が削除される。この文において、主節の C には EPP 素性が指定されているため、それを満たすために wh 句が主節の CP の指定部に循環移動する。(20)の文においては、wh 句を含む名詞句は前提となっていないためその名詞句の CP の指定部に演算子は生起しない。その名詞句の CP の指定部は wh 句の移動の際の可能な移動経路であるが、そこに演算子が埋まっていないためそこを経由した移動になる。この移動は MLC に抵触することはないため、(20)のような文は容認されることになる。

以上、前提となる文、前提となる名詞句には演算子が存在し、それらから wh 移動が生じる場合、その演算子を越えた移動になるため、wh 移動が不可能になることを見てきた。では、次にこうした分析の帰結について見ていくことにする。まず複合名詞句制約から見てみよう。

(21) a. *What did John hear the rumor that you had bought?

b. [_{CP} what C-did [_{TP} John [_{VP} hear [_{CP} OP [_{DP} the [_{NP} rumor [_{CP} that [you had bought]]]]]]]]]

(21)の文において、複合名詞句を構成する名詞 rumor は補文に同格節をとっているが、その補文の内容は前提となる。そのため、その同格節をとる名詞も前提となり、名詞の投射範疇の CP の指定部に演算子が生起する。同格節内の wh 句が移動した場合、同格節を導く名詞の CP の指定部が移動の経路となるが、演算子が生起しているためそこを超えた移動になる。(21)のような文が排除されるのはこのためである。こうした例は、以前は下節の条件によって説明されていたが、ここでの分析によれば下節の条件を捉え直すことが可能である。

次に、多重 wh 疑問文に関する例を見てみよう。日本語や中国語は wh 移動を示さない言語であるが、これとは対照的に、言語の中には、複数の wh 句を一度に移動させる言語がある。前述のように、顕在的な wh 移動は EPP 素性の要請によって駆動されているとすれば、複数の wh 句が移動した場合、その収容先は作用域を決定する投射範疇の多重指定部であることになる。これに関連する例としては、多重 wh 疑問文において、複数の wh 句をすべて顕在的に移動させる言語である。こうした言語にはブルガリア語、ルーマニア語等がある。

(22) *Bulgarian*

a. Koj kŭde misliš [ce e otišŭl ___]?
who where think-2s that has gone

b. *Koj misliš [če e otišŭl ___ kŭde]?
who think-2s that has gone where

(Rudin (1988 : 450))

(23) *Romanian*

a. Cine cui ce ziceai [că i -a promis ___]?
who to whom what said-2s that to him has promised

b. *Cine cui ziceai [că i-a promis ce ___]?
who to whom said-2s that to him has promised what

(Rudin (1988 : 452))

これらの言語では、wh 句が複数 CP の指定部に移動することになるが、指定部を複数許容するシステムの提案は、既に Kuroda (1988) にある。同様の提案は、Chomsky (1995, 2000, 2001), Koizumi (1995), Ura (1994, 1996) においても提示されており、これらの分析では、素性照合も複数の指定部との間で成立すると主張されている。この主張に基づき、これらの言語では、wh 句の作用域を決定する主節の CP の C に EPP 素性が複数指定されるため、複数の wh 句がその指定部に循環移動していると考えられる。しかし、英語においては多重 wh 疑問文の wh 句は一つのみが移動し、残りは元の位置に留まる。これは、英語は wh 句の移動に関して複数の wh 句を収容できる指定部を持たず、一つのみを収容能力しかないためであると考えられる。従って、wh 句の作用域を決定する CP の C には一つの EPP 素性が指定され、それによって一つの wh 句が顕在的に作用域を決定する CP の指定部へ移動することになる。英語の多重 wh 疑問文においては、このように一つの wh 句が顕在的に移動するが、元の位置にある wh 句もまた移動した wh 句と同じ作用域をとることができる。

(24) *Who bought what?*

(24)のような例では、目的語の wh 句は移動していないが、主節を作用域にとることができる。では、それはどのようにして行われるのであろうか。考えられるのは Heim (1982) 流の wh 句に対する無差別束縛 (unselective binding) である。(24)において主語の wh 句は既に CP の指定部に移動しているため、作用域が決定している。しかし、目的語の wh 句は元の位置にあるため、作用域はまだ決定していない。そこで、CP の C が目的語の wh 句を無差別束縛することで、目的語 wh 句が主節を作用域にとることが可能になる。

こうした束縛は介在性効果がない形で行われなければならない。例えば、英語では、多重 wh 疑問文では優位性効果が観察される。

(25) a. *Who bought what?*

b. **What did who buy?*

これは、wh 句とその変項 (variable) との間の束縛関係が破綻して生じたものと考えられる。移動した wh 句は必ずその変項を束縛しなければならないが、(25a)においては、移動しているのは主語の wh 句であり、局所的にその変項を束縛している。しかし、(25b)においては、目的語の wh 句が移動しており、その wh 句が変項を束縛する際に主語

の wh 句が目的語の wh 句の変項を c 統御することで、主語の wh 句が介在性効果を生じさせている (Stroik (1996), Munemasa (2003) 参照)。(25b) が非文法的であるのはこの介在性効果が生じ、目的語の wh 句とその変項との間の束縛関係が破綻してしまっているためであると考えられる。

これと同じことが、多重 wh 疑問文において名詞句の中に wh 句が留まる例にも当てはまる。

- (26) a. *?Who said that friends of who kicked Egbert?
b. Who said that Egbert kicked friends of who?

(Diesing (1992 : 132))

(26a)においては、元の位置にある wh 句は補文の主語の中にある。この wh 句は主節の CP の C によって無差別束縛されることで主節を作用域にとることが可能になる。しかし、その wh 句は主語の中にあり、主語は前述のように常に前提となるため、その主語名詞句は演算子を持つことになる。この演算子の存在により、主節の CP の C からの束縛が介在効果で破綻し、文が非文となっている。一方、(26b)の例では、元の位置にある wh 句は補文の目的語の中にあり、定冠詞など前提となる決定詞も付いていないので、前提とはなっていない。従って、その名詞句には演算子が存在せず、主節の CP の C からの束縛が介在効果なく行われ、文は非文とはならない。この介在効果は、wh 疑問文だけでなく、否定極性表現の認可にも当てはまる。Klima (1964)によると、否定極性表現は wh 句と同じく affective な要素によって認可される。これに従えば、否定極性表現は否定辞等の要素によって c 統御、さらに束縛されることで認可されることになる。これに基づき次の例を見てみよう。

- (27) a. Mary believed John's claim that he has some money.
b. *Mary didn't believe John's claim that he had any money.

(久野・高見 (2007 : 208))

(27)の例では、名詞 claim が補部に同格節をとり複合名詞句を形成している。こうした複合名詞句の同格節は内容が前提となるため、それを補部にとる名詞も前提となる。前提になるのであれば、その名詞句の中に、正確には名詞句の CP の指定部に演算子が存在することになる。(27b)の同格節の中の否定極性表現 any は主節の否定辞によって c 統御されているため、それによって束縛されることになる。しかし、文自体が非文である。これは、同格節を導く名詞句の CP の指定部に演算子が存在し、これが否定辞と否定極性表現の間に介在し、両者の束縛関係を破綻させているためであると考えられる。

前にも述べたように、弱い決定詞を伴う名詞は通常前提とはならないことを述べた。次の例は、弱い決定詞を伴う名詞句の中に wh 句が留まっている例である。

- (28) a. Who said that Egbert painted a picture of who?
b. Who said that Egbert drew many pictures of who?

- c. Who said that Egbert painted three pictures of who?

(Diesing (1992 : 132))

これらの例では、元の位置にある wh 句は前提とならない名詞句内にあるため、その名詞句に演算子は存在しない。それで、元の位置にある wh 句の作用域決定のため、主節の CP の C によって無差別束縛される際の介在子が存在しないので非文にはならないことが予測される。一方、次は強い決定詞を伴う名詞句の中に wh 句が留まっている例である。

- (29) a. ??Who said that Egbert drew every picture of who?
b. *?Who said that Egbert painted the picture of who?
c. *Who said that Egbert painted most pictures of who?

(Diesing (1992 : 132-133))

これらの例においては、元の位置にある wh 句は前提になる名詞句内にあるため、その名詞句に演算子が存在することになる。それで、元の位置にある wh 句の作用域決定のため、主節の CP の C によって無差別束縛される際の介在子、この場合演算子が存在するので非文になることが予測される。

4. 結語

本稿では、名詞句からの wh 移動に焦点をあて、名詞句から wh 移動が可能な場合とそうでない場合を従来の名詞句とは違った構造を仮定し、その中に生じる演算子の有無によって説明できることを述べた。名詞句は本来は DP までの投射になるが、ここでは位相という観点から、DP の上に CP が投射する。名詞句はそれが前提になる場合とそうでない場合があるが、前提になる場合その中からの wh 移動が阻止される。これは名詞句の CP の指定部に演算子が存在し、その中から wh 移動を起こすと演算子が移動の障害となるため、移動が阻止される。また、名詞句の中に wh 句が留まり、作用域を決定する際、前提を表す名詞句内であれば非文となる。これも、作用域を決定する際に名詞句の CP の指定部に演算子があるため介在効果が生じるためである。このように、名詞句からの wh 移動及び作用域決定は、名詞句内の CP に演算子が存在するか否かに依存すると言える。

参考文献

- Abney, Steven Paul (1987) *The English Noun Phrase in its Sentential Aspect*, Doctoral dissertation, MIT.
Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.
Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries: The Frame-

- work,” *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, 89-155, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2001) “Derivation by Phase,” *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2007) “Approaching UG from Below,” *Interfaces + recursion = language?: Chomsky’s Minimalism and the View from Syntax-semantics*, ed. by Uli Sauerland and Hans-Martin Gärtner, 1-29, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Chomsky, Noam (2008) “On Phases,” *Foundational Issues in Linguistic Theory*, ed. by Robert Freidin, Carlos Otero, and Maria Luisa Zubizarreta, 133-166, MIT Press, Cambridge, MA.
- Diesing, Molly (1992) *Indefinites*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Erteschik, Nomi (1973) *On the Nature of Island Constraints*, Doctoral dissertation, MIT.
- Fiengo, Robert and James Higginbotham (1981) “Opacity in NP,” *Linguistic Analysis* 7, 395-421.
- Heim, Irene (1982) *The Semantics of Definite and Indefinite Noun Phrases*, Doctoral dissertation, University of Massachusetts.
- Klima, Edward S. (1964) “Negation in English,” *The Structure of Language*, ed. by Jerry A. Fodor and Jerrold J. Katz, 246-323, Prentice-Hall, Englewood Cliffs, New Jersey.
- Koizumi, Masatosi (1995) *Phrase Structure in Minimalist Syntax*, Doctoral dissertation, MIT.
- 久野暲・高見健一 (2007) 『英語の構文とその意味—生成文法と機能的構文論』開拓社, 東京.
- Kuroda, Shige-Yuki (1988) “Whether We Agree or Not: A Comparative Syntax of English and Japanese,” *Linguisticae Investigationes* 12, 1-47.
- Melvold, Janis (1991) “Factivity and Definiteness,” *MIT Working Papers in Linguistics 15: More Papers on Wh-Movement*, ed. by Lisa Lai-Shen Cheng and Hamida Demirdash, 97-117, MIT.
- Milsark, Gary L. (1974) *Existential Sentences in English*, Doctoral dissertation, MIT.
- Munemasa, Yoshihiro (2003) *An Optimality Theoretic Approach to the C-system and its Cross-linguistic Variation*, Kyushu University Press, Fukuoka.
- Rudin, Catherine (1988) “On Multiple Questions and Multiple WH fronting,” *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 445-501.
- Stroik, Thomas (1996) *Minimalism, Scope, and VP structure*, Sage Publications, Thousand Oaks.
- Ura, Hiroyuki (1994) “Varieties of Raising and the Feature-Based Bare Phrase Structure Theory,” *MIT Occasional Papers in Linguistics* 7.
- Ura, Hiroyuki (1996) *Multiple Feature-Checking: A Theory of Grammatical Function Splitting*, Doctoral dissertation, MIT.